



Title	『懷徳堂展覧会目録』の課題
Author(s)	上田, 穰
Citation	懷徳. 1986, 55, p. 35-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90661
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『懷徳堂展覧会目録』の課題

上 田 穰

はじめに

明治四十四年十月一日～同六日まで、府立大阪博物場美術館で開催された懷徳堂展に際して発刊された『懷徳堂展覧会目録』は、我々に多くの示唆を与えてくれる。ここでは、特に「諸家出陳目録」の中で小論では次ぎの問題点について取り上げてみたい。

一、中井竹山（一七三〇～一八〇四）と中井履軒（一七三二～一八一七）の肖像画について

(1) 中井竹山の肖像画

京都の並河家から「一、竹山自画像」が一幅出品され、光本誠一氏から「一、自像自賛」一幅、河内の竹村久三郎氏から「一、自賛画像 藍江筆」一幅が出品されている。明治四十四年の時点

では、以上三点の竹山画像が出品されているのである。

(2) 中井履軒の肖像画

履軒の肖像画については、「懷徳堂水哉館遺書遺物出陳目録」の「肖像類」に記載された「履軒先生肖像伝中井藍江筆」とあるものである。

二、「諸家出陳目録」の二・三の出品者とその出品物について

(1) 京都の革嶋鋳太郎氏の出品物

(2) 中河内の稲垣環二氏の出品物

(3) 中河内の竹村久三郎氏の出品物

一、中井竹山と同履軒の肖像画について

(1) 中井竹山の肖像画

明治四十四年、中井家によって出品された「懷徳堂・水哉館遺書遺物出陳目録」には、竹山の画像はなかった。「諸家出陳目録」に京都の並河家、光本家、竹村家の三点だけが記載されていた。しかも、このうちで「中井藍江筆」と画家名を明記してあるものは竹村家のものだけであった。並河家のものは、明治四十四年十月一日、幸田成友氏によって編纂発行された『懷徳堂旧記』の冒頭の口絵写真に、「中井竹山肖像 京都並河総次郎氏藏」として紹介されており、後年（大正末年）に富岡鉄斎（八十九翁）が、これを懷徳堂記念会に納めるために並河家に懇望し、替わりに鉄斎が模写して贈ったことから、現在、大阪大学懷徳堂文庫所蔵の竹山画像（一三〇・〇×五五・八）が並河家旧蔵のものであることが判かる。だが、この画像の右下隅には「中直」（中井藍江）の印が捺されているにも拘らず、当時の目録では画家名を明記していない。このことは、(1)当時、画家名が判かっていたにも拘らず、目録の編集が杜撰であったため記されていない。(2)当時は「中直」の印だけでは画家の推定ができていなかった。以上の二点が考えられる。確かに、竹村家からの出品物には「自賛画像藍江筆」と明記されており、これが意識的な記録であるとすれば、当時

はこの竹村家の竹山画像だけが中井藍江筆としてみられていたと考えられる。ただ、残念ながら、この竹村家の竹山画像に関しての記録がその後全くみられないのである。後述することではあるが、竹村家に明治四十一年八月、中井履軒賛・蔀関月筆採蓮図を模写すべく訪ねた中井天生（黄裳、一八五五—一九四三）氏も、さすがに竹村家の竹山画像については記録されていないのである。これは、どうしたことなのであるうか、甚だ不可解な問題である。

『大阪市民博物館報』第八号（大正十三年刊）所収の「贈位郷賢事績展覽會」（大正十三年六月一日〜同十五日）における「列品目録」によると、竹山画像は京都並河家のものと、大阪市西区の生谷卯兵衛氏の二点だけが記載されている。ここで、生谷卯兵衛氏所蔵の竹山画像が登場するが、これについてもそれ以上の記録が残されていないのである。また、『懷徳』四十一号所収の羽倉敬尚氏による「懷徳堂回顧展」は、戦後の昭和三十年九月二十七日〜同十月二日まで大阪駅前前の阪急百貨店六階美術部陳列場で開催された。この展覧会では竹山画像が三点出品されている。その内の一つに、原図が蔀関月（一七四七—九七、月岡雪鼎門）筆であるという竹山画

像の模写本一幅が所蔵者を記載せずに出品されている。

この模写本の筆者は「平安画家原在在寛写」とある。この筆者については、京都の画家で原在中（一七六〇—一八三七）その子原在正、同在照、在泉という人物があり、恐らく、その系統の画家とみられるが、何時頃の人物なのか不明である。原図である蔭月筆の竹山画像は今迄に出品されておらず、それだけにこの写本の行方を追いつけてみたいものである。嘗て原図が存在した可能性は充分にある。閏月は中井藍江（一七六六—一八三〇）の師であり、『懷徳堂内事記』によると、天明三年正月に「左塾東手画工蔭月より受申度由にて為致住居候」とある。伊丹の鹿島屋（現・柿衛文庫）には、天明元年（一七八一）〜寛政六年（一七九四）の間に製作された蔭月筆の絵に竹山とその子蕉園によって賛された作品が数点伝存している。この絵師蔭月筆の竹山画像が存することは充分に考えられることなのである。

他の二幅の竹山画像は、一幅は並河家伝来の藍江筆竹山画像であり、もう一幅は並河家のものを原図として鉄斎が大正末年に模写したものである。羽倉氏は「原図は京都の旧家（並河家——上田註）に伝わったものを大正末年八十九翁鉄斎が、懷徳堂記念会に納めるため懇望し

替わりに模写して贈ったもの」としている。この鉄斎筆

写の竹山画像は現在、天理図書館に所蔵されている。別に、森繁夫著『含翠堂考』（昭和十七年三月三十一日、大阪青年塾堂発行）の口絵に紹介されている竹山画像がある。これは並河家本の藍江筆竹山画像とは全く別系統のものともみられる。但し、賛は並河本の竹山の賛と同じものを筆写しており、口絵写真では非常に判読し難いのであるが、「右題言……自賛……蔭山主人歎録（「作か」）とあり、続いて「中井曾縮」とある。曾縮は中井碩果（一七七一一一八四〇）のことである。蔭山（ほうさん）に該当する人物は二人おり、一人は淡輪元潜であり、他の一人は諸木雄助である。元潜は安永・天明期の柳川藩儒医（大阪在勤）で、中井蕉園の室は元潜の女である。諸木は安政・文久頃の儒者である。この場合、二



竹山像（中川鯉淵画）
（本誌41号より）

人の何れを指すか不明である。また、羽倉敬尚氏は前掲懷徳堂回顧録の中で、中川鯉淵筆の竹山画像をカット風に挿入しておられる。

この画像が、この『含

翠堂考』所収の竹山画像をやや正面から描いているという点で、その構成が似ているのである。「鯉淵」と号した画家には、文久元年版の『当時現在広益諸家人名録』によると、大阪の「大名小路」に住した備前藩の清泉寿太郎があり、他にも『安政文雅人名録』や『文久文雅人名録』に載せているところである。同一人物かどうか疑問が残るが中井碩果と同時代の人物とすれば、その可能性はある。この種の正面から描かれた竹山画像と、都関月筆の竹山画像との関係も興味あることながら、資料不足のためそれ以上のことは判からない。また、最近になって木南卓一氏所蔵の中井履軒筆写の竹山画像（一三一・七×五一・四）のあることがわかった。原図は並河家本の藍江筆竹山画像を模写したもので「積徳」の朱印を捺すのみであるが、賛は並河本と同一の竹山自筆の賛があり、落款部分の構成が異っている。すなわち、並河本での竹山の落款では朱文「積善印記」と白文「井渌老人」の何れも前川虚舟刻の方印を使用している。木南本の竹山の落款では、朱文「積善」（源重数刻）と白文「竹山居士」（木沢福庵刻）の方印を使用している。木南本の竹山画像には、箱書があり「中井竹山翁肖像自賛画、則弟履軒翁所作用筆、簡古無一点丹青者流臭気妙在意外焉、



中井竹山画像（大阪大学蔵）



中井竹山画像（木南卓一氏蔵）

賛語謙讓中隠、然有自任之意這翁抱負可想也、書体勁拔可謂具中井氏一家之筆法此矣、戊午秋晚南州外史題簽并識」とある。ここでいう「戊午」とは大正七年（一九一八）のことで、「南州外史」とは近藤石顚、名は同、字は子同、石顚または尺天とも号した。別に瘦藤、人瑞、元粹、南州外史の号あり。讃岐の人。中村三蕉に漢学を学び、明治二十年浪華に住んで印刻を以って業とした。この近藤元粹が大正期にこの軸を入手したものだと思われる。

る。それ以前の伝来は不明である。さて、中井藍江筆の竹山画像について、竹山自身が寛政十年（一七九八）三月四日付の頼春水（一七四六—一八一六）に宛た書状のなかで「……当初春会之節、関月（蔀関月、寛政三年没、上田註）／門人に藍江と申画師有之候て／少々文雅之志も有之候、直ニ門前住居、／詩会にも列候事にて、門下に列て心安く／画も甚達者にて、右之節、席画等／追々出来候故、坐客之所望にて老夫／講説之所を肖像致候様との望にて／早速出来候故、座中に被迎候て、席上に／自賛も致し申候、厚顔なから是非／被仰付候へ、世俸方へ御托し可被遣候、右之／画人、随分応命可被申候……」（頼惟勤氏所蔵文書参照）とある。これによると、竹山自身もこの藍江筆の自画像をかなり自慢している趣が窺える。しかし、この様な書状が春水に宛られていたからといって、頼家に竹山画像が伝存していたという痕跡は認められないのである。※

※竹山の『寛陰集』に「題予写照」として題詩が紹介されているが、その序に「戊午（寛政十年、上田註）正月既望初講日、宴酣書画競作、渋井子要揖画人藍江写予講座像、席賓迫予銘之、不得辞免、醉中援毫即書」とある。

また、頼家には、中井竹山が頼春水に宛た書状や詩文が非常に丁寧に保存されている。しかし、竹山画像は伝存し

ておらず、また、これを依頼し受け取った時の送り状の様なものも残っておらない。

然しながら、『文恵先生裏事録 続』（仮題「竹山先生香儀簿」）によると、絵師中井藍江は金百足（金二分）を香儀料とし、別に御所柿を供えている。上位門人は別として、一般門人は南鐐一片（金二朱）であることからみれば、かなりに大きな額面のものを出している。※

※例えば、山片家の場合、当主の平右衛門が金五百足であるが、次ぎに家格の上では分家として上位にある平次郎が金百足で、一代限り親類次席の長谷川七左衛門（蟠桃）が三百足の香儀料を出している。このことは、地位の高低ではなく、師弟の関係の強弱を示しているものと思われる。

以上のことから、竹山が春水に宛て自画像の筆者藍江を推薦した様に、他へも絵師藍江の宣伝をしていた可能性は充分にあると考えられる。事実、明治四十四年の時点の「出陳目録」では、藍江筆の竹山画像は並河家と竹村家には確かに存在したとみられるからである。光本家のものも藍江筆であったかも知れない。今後の調査を期待する次第である。

明治以降、懷徳堂再建熱は復活した。そのため、明治四十四年には並河家旧蔵の複製が百部作られた。※

※『懷徳』第十九号（昭和十六年十月十二日発行）の巻末付

録である「懷徳堂所蔵 懷徳堂先賢著述書目」の中で、明治四十四年十月五日の懷徳堂先賢祈念祭の時に中井黄裳氏が並河家本の竹山画像を百部影写して同記念会に寄贈された旨が記載されている。

(2) 中井履軒の肖像画

中井履軒の肖像画は、明治四十四年の『懷徳堂展覽会目録』の「懷徳堂水哉館遺書遺物出陳目録」の中に「一、履軒先生肖像一幅 伝中井藍江筆」として一点だけ出品されている。「諸家出陳目録」の中には一点も出品されていないのである。

幸田成友編の『懷徳堂旧記』（明治四十四年十月一日発行）では、「中井履軒先生肖像」として出品者は「東京 中井木菟麿（黄裳氏のこと、上田註）」となっており、口絵写真にも紹介されている。しかし、筆者のことは何も記されていない。もしかすると、中井家では筆者が藍江であるという言い伝えがあったのかも知れない。然し、これは根拠のないことである。

ところが、大正十三年の「贈位郷賢事績展覽会陳列目録」（『大阪市民博物館報』第八号所収）によると、京都の並河家から履軒画像一幅、別に大阪市西区京町堀上通二丁目の生谷卯兵衛氏が「三邑崑山書金谷謙画 中井

履軒遺像軸」一幅を出品している。履軒の肖像画については、中井黄裳氏の自筆稿本『懷徳堂水哉館先哲遺事卷四』（大阪大学懷徳堂文庫蔵）水哉館の部の履軒遺事によると、「履軒ノ容貌ハ家蔵ノ肖像ニヨリテ推測スルヲ得ベシ、併シ是モ並河寒泉翁ノ話ニヨレバ、全然酷似シタリシトハ言ヒ難シ、蓋家ニハ此ノ種ノ画像三枚アリシヲ、一枚ヲ京都並河家ニ贈リテ、二枚ヲ留メタル其一ニシテ、寒泉翁ガ比較的酷似シタル由ヲ語ラレタル者ナリ」（傍線、上田註）とある。これによると、嘗て中井家には履軒の肖像画は三幅あったという。その内の一幅が京都並河家に贈られた。ところで、中井家に残された二幅であるが、これについては、すでに『懷徳』五十二号所収の加地先生による「懷徳物語」（二）で紹介されたものである。※

※『懷徳』五十二号（昭和五十八年十二月二十五日発行）参照

即ち、一つは従来からの大阪大学懷徳堂文庫にあった「文清先生遺像」（一一七・一×三五・八、画面三七・八×二六・八）一幅であり、もう一つは新田家から寄贈されたものである。※

※大阪市民立博物館展観目録『懷徳堂』五一頁参照

問題は、並河家へ贈られた履軒画像であるが、大正三年六月一日（同十五日の間、大阪市民博物館に出品された並河家のものがそれであるとみられる。

ところが、昭和三十年九月二十七日から同十月二日まで阪急百貨店で開催された『懷徳堂回顧展』で、所蔵者名は記載されていないが、これについて羽倉敬尚氏は「この履軒肖像は素描しか伝わらなく、これは草稿と思われる」として、その画像の賛に「宇内有斯人、宙間無斯人、散髮山之幽、大笑仰青天」とあり「右幽人先生自賛、外征孫並河鳳来（並河寒泉のこと、「朋来」ともいう。上田註）謹録」と記されている。そして、「浄書のものに自賛したことが知れる」とある。しかし、この履軒による自賛の詩は、元来、中井家に伝存した履軒画像には無かったものである。黄裳氏は、前掲先哲遺事巻四の中で、さらに履軒の肖像画について、「早野家ニモ履軒肖像一幅アリ、三村崑山ガ隸書ヲ以テ履軒ノ国詩ヲ題シタルモノナレバ、真ヲ得タル者ニ相違ナカルベシト思ハルレドモ、家蔵ノ容貞トハ異ナル所アリ、此ノ年齢ノ相違アル為カトモ考フ」（傍線、上田註）と記しておられる。※

※履軒の門人三村崑山（一七六二—一八二五）が隸書をもつ

て題書した履軒の国詩とは何であったのか。黄裳氏の前掲先哲遺事巻四に、「……枕上雜題自叙ノ詩ニ、宇内有斯人、宙内無斯人、散髮山之幽、大笑仰青天、トアルハ即是ナリ、嘗テ聞ク、斯ノ詩ヲ大書シタル者ヲ『吾ガ肖像ト思ヘ』トテ並河寒泉ノ父巨川ニ与ヘタリシ……」とある。黄裳氏に「履軒ノ国詩ヲ題シタルモノナレバ、真ヲ得タル者ニ相違ナカルベシ」と記されたことから、もしかするとこの詩と同一のものであったかも知れない。残念ながら、崑山隸書の「履軒の国詩」を具体的に記録したものは残っていない。

なお、『枕上雜題』は履軒の天明五乙巳年（一七八五）季春（三月）の自序によると、天明四年の冬から翌五年の春にかけて詠んだ五百首の詩（五絶）を録したものであることが解る。黄裳氏は「枕上雜題自叙ノ詩」としておられるが、これは大阪大学懷徳堂文庫所蔵の自筆稿本（一冊本）によると、本文（各五絶を一行ずつ紹介している）中、冒頭から六行目から七行目の間に挿入記号を付して欄外に問題の詩を記載している。ただ、この場合に題賛されている詩と少し異っている。それによると、「宙間有斯人、宇内無若人、散髮山之幽、大笑仰青天」とある。この写本は大阪府立中之島図書館（乾坤二冊）にも所蔵されており、自筆本と同一の詩を載せている。また、府立図書館本は岡本撫山（一八四〇—一九〇四）旧蔵のもので、撫山は天保十一年大阪に生れ、家業は代々富豪で銅座の役人を勤

めていた。懷徳堂に学び、明治以後は大藏省造幣局等に歴任した人物である。別に、国会図書館にも写本があり、門人達によって愛読された書物の一つであったとみられる。

既述の『贈位郷賢事績展覽會』（大正十三年）に出品された生谷卯兵衛氏所蔵の「中井履軒遺像軸」は、「三村崑山書、金谷謙画」とあることから、この履軒画像は早野家旧蔵のものであったことがわかる。道修町で薬種商を営んでいた生谷卯兵衛氏の隠居所が、西区京町堀上通二丁目にあった。大正年間に早野家から生谷家に入ったものと思われる。三村崑山は、名は其原、字は子達、通称は貞蔵、崑山と号し、別に玉来居と号した。浪華の人で履軒の門人。後年、西横堀で学塾をしていた。金谷謙は、当時天満組総年寄をしていた金谷三石（一七三二—九四）のことかと思われるが、「謙」と称した記録はない。三石は本氏は平松、名は興般、字は子般、通称は清右衛門、三石と号して備前岡山の人。浪華の金谷信行の嗣となっている。金谷氏は代々天満組総年寄をしていた。寛政六年（一七九四）六十三歳で没している。その墓誌録によると「頗涉儒学」とあり、絵については「最嗜画、祖南蘋沈氏、嘗祇役千長崎、繡江熊斐（熊代繡江のこと、上田註）花鳥、而山水人物、則自出機軸」とあ

る。この三石が履軒画像を描いたとすれば、寛政六年五月よりも以前に出来たものでなければならぬ。金谷三石の子、金谷遷斎（一七七四—一八三五）は名を興詩（初名は興忠）、字は立礼、通称を与右衛門といった。弘化五年（一八四八）刊の『古今墨蹟鑒定便覧』（内閣文庫蔵本）「地下哥人之部」によると、金谷興詩は「哥学ヲ修シテ詠哥ヲヨクス」とあり、絵は描かない。与右衛門もまた天満組総年寄をしており、『竹山先生御悔名簿』に記帳されており、『履軒先生香儀簿』には香儀料金百疋の拠出者として、その名を記載している。金谷三石が金谷謙であるとすれば、金谷家と三村家は何れも中井家に深く拘っていたものとしてクローズアップされてくるであろう。

しかしながら、黄裳氏に「真ヲ得タル者ニ相違ナカルベシ」と記させ、「家蔵ノ容白トハ異ナル所アリ」と言わせた履軒画像は残念ながら現在には行方不明である。或は、戦災によって消滅したものかとも思われる。また、並河家伝来本と思われる履軒画像（現、大阪城天守閣蔵）に、並河寒泉が謹んで録した履軒の詩は、黄裳氏の前掲先哲遺事卷四によると、並河家では「……後二人ニ借シタルカ何カデ紛失シ、其後一タビ家ニ還リタルコト

アリシガ、復散亡シテ所在ヲ失ヒタル由、寒泉翁深く遺憾ニ思ヒテ、常ニ此ノ事ヲ語リ居タリ」とあることから、寒泉は自家伝来の履軒画像に題賛したものと思われる。

現在、大阪大学懷徳堂文庫には二幅の履軒画像が所蔵されている。それは、「文清先生遺像」と題されて従来から蔵されていたものと、新たに寄贈された新田家旧蔵のものとのである。これについては、今回の大阪市立博物館展観目録『懷徳堂』本文五一頁に紹介しているのであるが、今、再述するならば、新田家旧蔵の履軒画像（一二六・三×三五・六、画面三七・四×二六・六）には、画像の上辺部に「会虞、觀天地第一」（『履軒古風』卷四所収）の自筆草稿全三枚が貼られており、画像は下絵の初期段階のもので、顔面部分の描線は決定線を模索しているところからくる重厚な趣や、机の雛形を前に置くなど迫真感があり、まさしく寿像といえるものである。また、この画像は何故か画像の周辺を破り取った様になっていて、後に表装し直した形跡を持っている。この自筆草稿「会虞、觀天地第一」の成立時期であるが、冒頭の「朕遊乎宇宙之間、七十載於今」とあることから、履軒七十歳の寛政十一年（一七九九）の時点であることがわかる。詩の内容は、『履軒古風』の自序からみ

て、「楚辭」になぞらえた南方系古風詩体をとっていることが判かるであろう。この年、麻田剛立（一七三四—九九）は六十六歳で没したが、麻田流天学の一門高橋至時（一七六四—一八〇四）や間重富（一七八二—一八四三）は幕府の改暦事業で活躍している。そして享和元年（一八〇一）には、履軒は華胥国新曆を製作している。

「会虞、觀天地第一」の一文を以てすれば、宇宙を彷徨し一微塵たる地球を眺めて「塵中之塵兮、人乃生乎其間」と賦しているのである。まさしく、迫真の力の込められた一幅といえるであろう。中井家では、この軸は最後まで終子女史（黄裳氏の妹）の手元に置いて大切に保管されたもので、終子女史のペン書きによる『（中井家）軸物使用順序』（昭和二十四年十月十三日記）では、正月前半の大幅の竹山先生肖像画幅に次いで、後半に使用する履軒先生肖像画幅はまさにこの画像幅を指しているものと思われる。

従来からの「文清先生遺像」は、画幅の上辺部に履軒の墓壙誌拓本（但し、末尾の四行分だけ）が貼ってある。画像の描線の具合からみても、まだ下絵の段階のものであるが、筆線の選択がされていることから、前者（新田家旧蔵本）を原図として作製されたものであることが判

かる。また、墓嶺誌拓本が貼られていることから、この画像幅は初めから履軒遺像として作られていたことも判かるであろう。

二、「諸家出陳目録」の二、三の出品者とその出品物について

明治四十四年の『懷徳堂展覧会目録』所収「諸家出陳目録」に記載された二、三の出品者とその出品物について整理してみると次の様になる。

(1) 京都の草嶋銆太郎氏の出品物

イ、五井蘭洲詩卷

ロ、中井竹山賛森周峰画牛図

ハ、中井竹山賛三宅春楼画蛙子図

ニ、中井竹山筆「和韵」

ホ、中井竹山筆原書案文(手記)

ヘ、中井竹山 門下生銘石卷

ト、中井竹山 革卦

チ、中井竹山手記帳簿

家事年中行事、勘定帳、

田畑整理案帳、年貢宛米帳、

リ、中井履軒筆並河寒泉副書

ヌ、三宅石庵、中井髷庵、五井蘭洲、中井竹山、同履軒張交(屏風)

(2) 中河内の稲垣環二氏の出品物

イ、中井髷庵筆是非五行書

ロ、五井蘭洲筆五言一行書

ハ、中井竹山筆赤壁画賛

ニ、中井履軒遺愛品 醉郷五瑞

ホ、同履軒筆伴行五言二句

ヘ、懷徳堂瓦当「寛政乙卯」

(3) 中河内の竹村久三郎氏の出品物

イ、中井竹山賛中井藍江画竹山画像

ロ、中井履軒賛蔀関月画採蓮図

(1) 京都の草嶋銆太郎氏の出品物

明治四十四年の『懷徳堂展覧会』(於府立大阪博物館)に出品された京都西南川島村(現、右京区川島玉頭町)の草嶋銆太郎氏は、前掲十件に及ぶ懷徳堂関係資料を出品しておられる。その内、中井竹山の手記帳簿四冊は現在、京都府立総合資料館に保存されている。※

※京都府立総合資料館には、銆太郎氏の養嗣子廉三郎氏によって、同家に伝存された中・近世の古文書一、六三〇点がある。

寄贈され、京都府指定文化財として保存されている。

京都府立総合資料館『革嶋家文書について』（昭和四十九年九月二十日発行）参照

革嶋家は中井竹山の妻順（一七四一—一八九）の里である。この様に、同家の古文書類の保存先ははっきりしているのであるが、遺物・遺品類はその殆どが判っていない。寺島（旧姓革嶋）卯子（しげこ）女史に訊ねて貰ったが不明であった。恐らく、銚太郎氏は二人の養子を迎えておられることから、これらの資料は両家に分断されたのではないかと憶測している。

(2) 中河内の稲垣環二氏の出品物

中河内（久宝寺）の稲垣家は、竹山の長子蕉園（一七六七—一八〇三）の一人女、照（一八〇二—一八五）の嫁いだ家である。照の夫で儒医の稲垣見立久遠は天保十五年十月二十日没し、見立の長男の厚太郎が天保十四年に没しているため、五男の謙蔵久敦（一八三九—一九〇〇）が嗣ぎ、菊堂と号して懷徳堂の助教をしている。菊堂の妻篠置（ささおき）氏（？ —一八七四）は八尾は産屋（さんや）の出身で、環山楼を主宰した石田家の一族である。稲垣環二（一八七一—一九五一）氏はこの菊堂の次男として生れている。明治二十九年十月環二氏は大阪

医学校を卒業している。中井黄裳氏とは特に親交があり、黄裳氏東京在住時代には環二氏は黄裳氏のもとに寄留していたことがあった。また、明治十八年八月には、環二氏にとっては祖母にあたる照が中井家で八十四歳で没している。このため、中井家との交流は環二氏の時代まで深く続けられていたのである。例えば、稲垣家の出品物である中井履軒の遺愛品「酔郷五瑞」は黄裳氏には非常に興味深かった様で、詳細な記録が残っている。「五瑞」とは、中国で天子が諸侯に頒った瑞玉のことで、公には桓圭、侯には信圭、伯には躬圭、子には穀璧、男には蒲璧とされていた。即ち、公・侯・伯・子・男の五等の諸侯は、天子と面談する時に天子に奉じて会見したという。履軒の遺愛品「酔郷五瑞」とは一体何であったのか。黄裳氏の実測記録によると、ガラス製酒器五基のことであった。これを収納した木箱には、履軒によって

「大者公侯、小者子・男、其中為伯位、適其選五等三品、酔郷之班、唯力是視、不彊其不能、（天楽）」とある。別に、「西夷之玉毘、吾之刻、春酒一注、化作琥珀、履軒幽人筆、（天楽）」（傍線、上田註）とある。「西夷之玉毘」とあることから、このガラス製酒器は舶来品である。黄裳氏の前掲先哲遺事巻四によると、これとは別にも履軒

は舶来酒器を所持していた様で、「履軒ノ用イタル阿蘭陀製ギヤマン金縁ノ盃ハ、今尚家ニ存セリ」とある。履軒の使用した印章にも「醉郷侯印」というのが二顆残っている。何時の頃からか、履軒は自分の住居を「醉郷」と称し、出入する親しい人々を諸侯に譬えていたものと思われる。履軒と照との間にも酒に関する逸話が残っている様である。黄裳氏はこれらの逸話を記して、「余ガ幼少ノ頃、右照子媼ガ時々懷徳堂ニ来リタル時ハ、其側ニ侍シテ履軒在世中ノ事ヲ聞クヲ樂トシタル」（前掲先哲遺事巻四）としておられる。昨秋、筆者は八尾市東久宝寺町の稲垣家を訪ねたが、座敷には履軒筆の「朝陽館」（扁額）が掲げられており、床の間には、中井竹山の墓塋誌拓本の軸装が懸けられていた。しかし、残念ながら、明治四十四年に出品された品々を見ることは出来なかった。

(3) 中河内の竹村久三郎氏の出品物

明治四十四年、中河内の長吉出戸の竹村久三郎氏は、二点の懷徳堂資料を出品している。その内の一点が、中井竹山賛中井藍江筆の竹山画像である。しかし、これについての黄裳氏の記録は全くなく、並河家本と比較すべき方法がない。ただ、竹村家所蔵の中井履軒賛菰閑月筆

採蓮図一幅については、黄裳氏は自らこれを摹写したばかりではなく、それについての記録を残しておられる。模写本は現在大阪大学懷徳堂文庫に蔵されているが、それには「明治戊辰（元年、上田註）先子（桐園、上田註）贈之於河内姻家（當時は竹村長次郎氏、上田註）」と記されている。これは、黄裳氏の自筆草稿『懷徳堂紀年』（大阪大学懷徳堂文庫蔵）の慶応四年戊辰春正月の項をみると、「伏見鳥羽役、近畿騷擾、華翁（寒泉、上田註）率家眷、避難於河内稲垣氏、中井家人避于竹村氏、桐園留護書院」とある。中井柚園（一七九五—一八三四）の長女で桐園（一八二二—一八八一）の妹にあたる葵（ふき）は竹村長次郎氏に嫁いでおり、桐園の家族はこの姻家を訪ねて避難したのである。この時、黄裳氏は十四歳で竹村家を訪れたことになる。黄裳氏の記録によれば、この際に謝礼として中井家から竹村家に贈られたものが、この採蓮図であったという。しかも、黄裳氏はこれに非常な未練を持っており、「咲違丹青四十有一年、戊辰（明治四十一年、上田註）八月、訪姻家、即清観之、鋪紙摹之」（大阪大学懷徳堂文庫蔵模写本採蓮図参照）と記しておられる。即ち、黄裳氏は明治元年から四十一年を経た同四十一年八月に再び竹村家を訪ね、この採蓮図を見

せて貰って模写したという。この黄裳氏模写の採蓮図は、その後、中井家で大切に保存され、中井家の『軸物使用順序』（昭和二十四年十月十三日、中井終子記）によると、毎年八月後半の部に中幅で「采蓮図部生画黄裳写」が挙げ記されている。※

※大阪大学懷徳堂文庫蔵、中井黄裳氏模写本の採蓮図幅（九八・八×三九・四）は、原図は中井履軒賛部関月筆。賛文は黄裳氏の模写によると「一様（同色、上田註）羅衣裳、阿誰同我心、心中有暗禱、會折並頭蓮、少（伴、上田註）女不解愁、採蓮無行腸、只（俱、上田註）道蚤歸去、細鐵繡箇様、履軒幽人題」（一）内は『履軒古風』による）とある。なお、履軒の使用印は、黄裳氏の書き判によれば、白文方形「隱居放言」印（但し、朱文方形なら懷徳堂文庫に現存する）と朱文長方形「天楽」（朱文方形なら現存する）印となっている。この賛文の詩は、『履軒古風』卷之三に「採蓮曲」として収録されており、その内の其二と其三を部分的に文字を換えて賛している。安永二年（一七七三）以前の作品である。

しかし、黄裳氏はこれ程迄に、親交のあった竹村家であつたにも拘らず、残念なことに、もう一幅の藍江筆の竹山画像について一片の記録も残していないのである。ただ、明治四十四年に出品されただけである。当然、黄

裳氏の眼に触れている筈なのであるけれども。昨年の夏、桐園の妹葵が嫁いだ竹村長次郎氏について、現在の大阪市平野区長吉出戸六丁目の現地調査を行ったが、縁故者はおらず、聞名寺（もんみょうじ、浄土真宗）の墓地で破損の激しい長次郎氏の墓石を発見することが出来た。墓石から考証してみても、葵女の没年は嘉永六年癸丑と慶応元年乙丑の何れかとみられる。慶応四年（一八六八）七月二十五日の桐園の妻霜（一八三〇—一六八）の没した際の裏事録には、竹村長次郎氏の名は記載されているが、葵女の名はない。このことから、慶応四年正月、中井家が竹村家に避難した折には、既に桐園の妹葵女は没していたことが判かる。※

※桐園の妻霜の裏事録『良信室君裏事録』（慶応四年七月二十五日）によれば、沐浴に立ち合ったのが、寒泉の三女豊（とよ）と四女閨菊（うるぎく）、そして蕉園の一人女照（てる）だけであつた。なお、竹村久三郎氏の直系は竹村久安氏（平野区長吉出戸六丁目七—四）であるが、久安氏は既に没しておられ、未亡人とその子の時代となっている。また、長次郎氏は明治三十二年に没しているが、年齢は判からない。その時点で絶家となつたとみられる。財産等は、久三郎氏に継がれたのであろう。

むすび

過去の懷徳堂展の出品物を丹念に追い掛けてみたが、まだまだ目の届かなかったところがあると思われる。今後、更に書き加えられ追加していかなばならないものである。

なお、文中で肖像画と画像を違い分けたが、前者は後者を丁寧に表示したものに過ぎない。また、小論を作製中に昭和四十一年八月十五日付で筆者に宛られた羽倉敬尚氏の手紙が出てきた。文中に懷徳堂回顧展のことに触れておられるので紹介しておく。「……阪急で『懷徳堂回顧展』、これは阪大の記念会、及び天理からも沢山拝借、これも不安でしたら蓋あけたら万更でない盛況、第二日、小林翁、二十分程見ていただき私案内で追々好評、『朝日』も紙上後援やってくれられ、毎日香里から弁当持ちで通ひました。つくづくこういう展覧会は、書き物とは、又別で、対称が頗る広く、いはば感化、影響も頗る大なる事を痛感します。……」とある。

終りに、此の度は懷徳堂記念会の評議員の諸先生方のご指導、とりわけ岸田知子女史と山中浩之氏には親身のご指導を賜りました。心からお礼を申し上げる次第で

ある。

(大阪市立博物館学芸課 研究副主幹)

會康 觀天地第一
朕造于宇宙之間七十載於今。古今之成敗。人事之憂幻。觀既賜予。莫可逃。載欲擇於於宇宙之衣。不願瞻手覆載之內。嗟。匪目力。收歟。願。微。若。予。仲。志。訪。妙。工。子。事。過。索。良。材。多。無。所。之。日。念。多。夜。思。竟。結。結。多。遠。涉。巨。空。多。滯。滯。徑。崇。數。子。微。坑。者。不。知。其。幾。何。子。寧。排。乘。之。與。西。哉。予。御。冷。風。子。凌。室。霜。軀。搖。以。披。靡。多。耳。聽。而。心。滿。曾。弗。審。牙。死。生。之。幾。況。能。判。旦。夜。之。期。飄。然。而。住。多。條。然。而。止。載。應。朗。然。洞。天。其。妙。吐。子。雲。某。文。校。於是。聖。嗽。於。飛。液。子。去。懼。之。振。埃。盼。子。危。如。懸。之。籍。子。以。鼓。之。鼓。乃。登。衣。扣。玉。關。而。冲。禮。宮。寶。自。子。珠。階。之下。陳。孫。子。以。訪。中。情。中。因。服。之。至。誠。傷。我。以。寶。鏡。子。遠。我。以。仙。臺。拜。辭。而。住。遠。典。聖。子。遊。子。翠。雲。而。訪。伴。子。琴。寶。劍。之。天。孫。降。金。僊。多。多。錦。籍。子。行。帶。天。香。芳。芳。而。寄。遠。光。紫。霓。多。融。映。轉。軸。不。散。子。王。胡。依。相。維。皇。天。之。晶。臺。如。飢。如。渴。子。似。玻璃。子。浮。夫。星。日。辰。之。珠。引。聚。子。其。聖。位。子。珠。子。其。有。光。嘆。天。漢。之。正。練。子。受。殿。其。增。廣。